

TPN水和剤はカキ炭疽病の開花前の防除に有効である

カキ炭疽病の開花前(4月下旬)の防除において、TPN水和剤(商品名:パスポート顆粒水和剤 FRACコード:M5)は慣行薬剤と比較して同等以上に防除効果が高い。高温期の散布は果実に薬害を生じるおそれがあるため注意する。

農業研究センター果樹研究所病虫化学研究室(担当者:福岡美里)

研究のねらい

カキ炭疽病の防除は、栽培期間を通して定期的な薬剤散布が必要となる。新梢での発生が多いとその後の果実での発生も多くなるため、効果が高い薬剤による生育初期(開花前)の防除が重要である。しかし、チウラム・チオファネートメチル水和剤(商品名:ホームコート)やマンネブ水和剤(商品名:エムダイファー水和剤)が登録失効見込みであるほか、防除効果の高いマンゼブ水和剤(商品名:ジマンダイセン水和剤 FRACコード:M3)の使用回数は2回以内である等、防除薬剤の選択肢は限られている。

TPN水和剤(商品名:パスポート顆粒水和剤 FRACコード:M5)は、2019年に適用拡大され、カキ炭疽病の防除薬剤として期待されるが、西南暖地で防除効果を検証した事例は少ない。そこで、カキ炭疽病の効果的な防除体系確立のため、本剤の防除効果を解明する。

研究成果

1. カキ炭疽病の開花前(4月下旬)の防除において、TPN水和剤1500倍は、慣行のマンゼブ水和剤500倍と比較して同等以上に防除効果が高い(図1)。
2. TPN水和剤は、高温期の散布で果実の日当たり面に褐点状の薬害を生じることがある(図2)。

成果の活用面・留意点

1. カキ炭疽病の生育初期(開花前)の防除薬剤としてTPN水和剤を防除体系に組み込むことによって、効果の高い薬剤の使用回数を温存することができる。
2. カキ炭疽病に対するパスポート顆粒水和剤の農薬登録の適用内容は、希釈倍数「1500倍」、使用時期「収穫30日前まで」、使用回数「3回以内」である(2025年12月現在)。なお、使用にあたっては、最新の農薬登録内容を必ず確認し、記載事項を遵守する。

【具体的データ】 No. 1168 (令和8年(2026年)5月) 分類コード 04-10 熊本県農林水産部

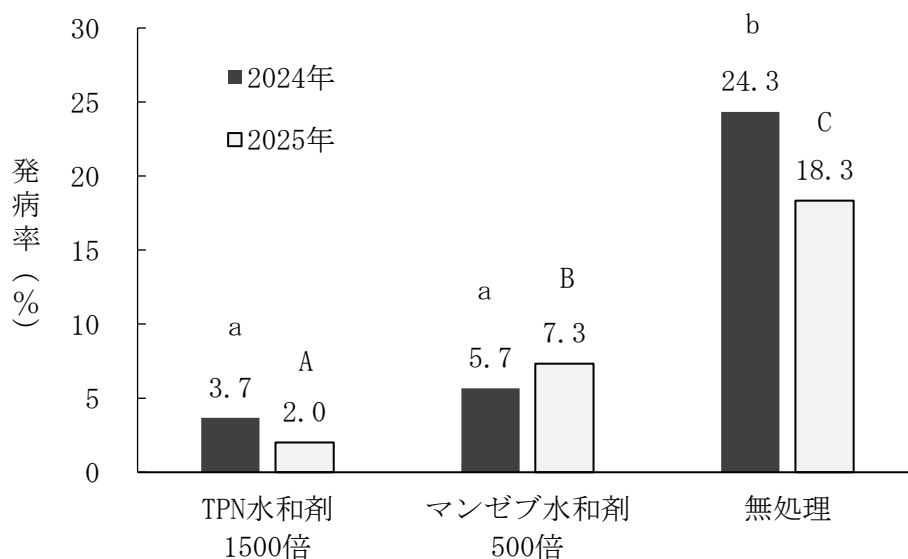


図1 TPN水和剤1500倍およびマンゼブ水和剤500倍処理後の新梢におけるカキ炭疽病の発病率

【試験概要】

試験場所：熊本県農業研究センター果樹研究所内

品種：「太秋」(22年生)

区制：1区1樹3反復

薬剤散布日：(2024年)4月17日、(2025年)4月24日

調査日：(2024年)5月13日(薬剤散布26日後)

(2025年)5月19日(薬剤散布25日後)

発病調査：1樹につき100新梢について、病斑の有無を調査し、発病率を算出した。

注) 各試験区間において、小文字及び大文字の異文字で炭疽病発病率に有意差あり

(ライアン法による多重比較、 $p < 0.05$)



図2 TPN水和剤を高温期に散布した場合の果実における薬害

【散布概要】

試験場所：熊本県農業研究センター果樹研究所内

品種：「太秋」(22年生)

散布日時：2025年9月1日午前10時 撮影日：2025年9月2日

散布時の気温：31.8度 散布日の最高気温：34.4度